
Holy Night

翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Holy Night

【ZPDF】

20144M

【作者名】

翠

【あらすじ】

【快斗×蘭】クリスマスイヴの夜くらいは悲しい顔をして欲しくなくて、快斗は蘭にプレゼントを用意していた。

聖なる夜に、君は何を望む？

アイシに会えますよ？

アイシと話せますよ？

……いや、君なら「アイシが、聖なる夜、ひいは平和に過ぎませま
すよ？」かな。

たまたま、狙っていたビックジュエルの近くに君がいた。
だから、君の事を調べもしたし、近づきもした。

幼なじみに似ていた君に、とても優しい君に、何にでも一生懸命
なところ、まっすぐな瞳に……目が離せなくなつた。

小さな名探偵のおかげで、オレは出かける先々で君に会つことが
できたし、気になつて会いに行つたこともある。

君がとても優しい顔をみせる名探偵のフリをしたりして。あれは、鳩を助けてくれた名探偵へのお礼の気持ちもあるけれど、なにより、君の涙を見たくなかったから。

オレが、オレに一番近い姿で、君の目の前に現れたかったから……。

今日はクリスマスイヴ。

街では恋人達が幸せそうに寄り添い歩き、家族がいつもより少し豪華な食卓を囲み、子供達はサンタクロースが来るのをわくわくしながら眠りにつく夜。

君はいつもと同じように家族と過ごすんだろうね。いつもと違つのは、そこにクリスマスらしいケーキやチキンがあつたりするところかな。

そして、夜は切なそうな顔をして、空を見上げてアイツの事を考えるんだろうか。

オレは、そんな君の顔は見たくないから……。

救世主の誕生を祝う、聖なる夜くらいは……。

君には笑つっていてもらいたい。心からの笑顔で。

だから、これは白いサンタクロースからの、君へのプレゼント。

「しん……こち……？」

「よお、蘭」

夜。探偵事務所の屋上で、やはり君は空を見上げていた。

「どうして……」

「どうしてって、今日は何の日だよ？ クリスマスイブ、もじらーせ、事件のこと忘れないとな。オマーが寂しがってんじゃねーかと思つて、会いに来てやつたんだよ」

「私が、寂しがつてると思つて……？」

君は大きな黒い瞳を驚きでこいつぱいにして、オレを見つめた。不意に瞳が揺れたかと思うと、大粒の涙が頬をつたい流れ落ちる。

「ら、蘭……」

「「」、「」め……うれしくて」

涙をぬぐい、頬をほんのりと赤く染めて微笑む君は、とてもまぶしかつた。

抱きしめたくなる衝動を、オレは手を握り締める」とでからうじ

て堪える。

今のオレは、黒羽快斗じゃない。

君が求めているのも、オレじゃない。

だから、できない。

それは……アイツだけに許されたことだから。

でも、これだけは……。されば、いいよな。

「バーコ、泣くんじゃねーよ」

オレはポケットの中から小さな箱を取り出すと、君に放り投げた。慌てて両手で受け取った君は、手の中にある青いリボンで飾られた小さな白い箱を、黒い大きな瞳で不思議そうに見つめた。

「これ、は……？」

「オレからの、クリスマスプレゼントだよ。いつも……待たせてつからな」

君が幸せであつまよつ。

いつも笑顔でありますように。

そういう願いを込めた、オレからの贈り物。

「開けても、いい?」

君は愛しむよつに包み込んだ両手の中の箱と、オレの顔を交互に見る。

オレはずつと微笑んでいたらしい。さらに微笑みながいりつなづくと、じづぞとばかり手を差し出した。

君は緊張した面持ちでリボンに手をかけ、丁寧にラッピングをといていく。

箱を開いた君は、大きな瞳をさらに大きくして中からひとつスリラップを取り出し、見つめた。

「きれい……」

白い手につまみあげられた、濃紺の革紐ストラップの先には、一風変わったクリスタルが光っている。

「ファンタムクリスタル」

「え?」

「幻影水晶つていうんだ。きれいだろ?」

「幻影……うん。それに、とても不思議……」

君は水晶の中で煌く光を不思議そうに、うれしそうに見つめているが、オレに視線を移し、花がほころぶように微笑んだ。

「ありがとう。大切に使つね」

幸せだ。

オレは、来て良かつたと思った。君の、笑顔が見れたから。

「さてと」

腕時計を確認する。

そろそろタイムアップだ。

「気に入ってくれたみたいでよかったですよ。んじゃあオレはそろそろ行くわ」

「え?」

「「」の寒空に、あんま長い間オメーを出しておくわけにはいかねー

しな

君の頭をポンポンとなでる。すると君は必死な顔をしてオレの服をつかんだ。

「待つて！ お願い、すぐだから。私も、プレゼントがあるの。お願い

君はそのまま消えてしまつべきか……。

取り残されたオレは、呆然と君が消えた扉を見つめていた。

参つた。

」のまま消えてしまつべきか……。

君が持つてくるモノはオレへのプレゼントじゃない。
オレがもらう資格はない。

でも……せつかく君の笑顔を見れたのに、黙つて消えてしまったら、また泣くかもしれない。

それは、望んでいない。

どうしたら……。

迷つてこらひながら、階段を駆け上がつてくる音が聞こえた。

もう遅い。

覚悟を決めるか。

君は、青い大きな袋を抱えて、白い息を弾ませながらオレに駆け寄ってきた。

「お待たせ」

「ん、ああ。悪いな……蘭」

「ううん。今日は来ててくれて、本当にありがとうございます。すいませんでしたよ？」

君は小首をかしげてオレを見上げた。

かわいいつづーの！

オレが君に見惚れてぼんやりしていると、暖かいものが首を包み込んだ。

それは、青い袋から出された、白い白いマフラー。

君がかけてくれた。

とても、暖かかった。

「蘭……オマーが編んだのか？　これをおれに？」

「そう。私が編んだの。貴方のために」

ちくんと胸が痛む。

アイツのために、編まれた白いマフラー……。オレがもらつてしまつて、いいのかな……。

「そういえば、言つてなかつたね」

「ん？　何を」

君はオレにかけたマフラーを結んで、ポンポンと整えると、とびきりの笑顔で微笑んだ。

「メリークリスマス！　キッズ！」

.....
めこつ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0144m/>

Holy Night

2010年10月10日01時03分発行